舟橋村

塚　越　Ⅰ　遺　跡

２０００．３

舟橋村教育委員会

序

舟橋村は、県東部・富山平野のほぼ中央にあって、緑豊かで住み良い文化的な都市近郊農村を目指しています。近年は、人口増対策により、村外からの移住者が増加しております。

今回、稲荷地内において、宅地造成が行われることになり、それに先立ち、当地域の塚越Ⅰ遺跡の本調査を平成11年度に実施いたしました。

調査の結果、鎌倉時代の掘立柱建物跡が確認され、村の中世史を知る上で、貴重な資料となりました。

おわりに、調査実施および報告書の刊行にあたり、富山県埋蔵文化財センターをはじめ関係者各位にご援助・ご協力を頂きました。

衷心より感謝申し上げます。

平成12月３月

舟橋村教育委員会
教育長　藤　塚　孝　雄

例　言

1．本書は、富山県舟橋村稲荷に所在する塚越Ⅰ遺跡で、平成11年度に実施した発掘調査の発掘調査報告書である。
2．調査は、民間住宅団地造成事業に伴う道路新設に先立ち、舟橋村教育委員会が実施した。
3．調査主体は舟橋村教育委員会であるが、調査実施にあたり富山県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受けた。
4．調査事務局は舟橋教育委員会に置き主事吉田昭博が事務を担当し、総務課長金森勝雄が総括した。
5．出土遺物と調査に係る資料は富山県埋蔵文化財センターが保管している。遺物の注記は、塚越Ⅰ遺跡を示す「塚越Ⅰ-　」に調査年度・出土地点等を併記した。また、本書に掲載した遺物は、コンテナに入れ収蔵してある。
6．発掘調査担当者は次のとおりである。
　富山県埋蔵文化財センター　調　査　課　長　宮田進一
　同　文化財保護主事　越前慶祐
7．各年度の発掘調査面積は、平成11年度は約190㎡である。
8．本書の作成は、富山県埋蔵文化財センター職員の協力を得て、調査担当者がこれにあたり、越前がこれにあたった。
9．本書は本文・計測表と巻末図版（挿図・写真図版）からなる。本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。
　1）遺構番号は遺構の種別ごとに付した。掘立柱建物－ＳＢ、土坑－ＳＫ、柱穴・小穴－Ｐ、溝－ＳＤと表記する。
　2）本書で示す方位はすべて磁北、水平基準は海抜高である。
　3）引用･参考文献は著者と発行年（西暦）を［　］で文中に示し、巻末に一括して掲載した。
　4）土層の色調については、農林水産技術会議監修「新版標準土色帖」（1994年版）に基づいている。
　5）本文・図版・写真図版および各計測表・観察表中における番号は共通である。
　6）遺構図版の縮尺は原則1/40、掘立柱建物平面図は1/60とした。
　　遺物実測図版は1/3、遺物写真図版は等倍である。

目　次

本文目次

序・例言・目次
1．位置と環境……1
2．調査に至る経緯……1
3．調査の結果……2
　1．基本層序……2
　2．遺　構……2
　3．遺　物……2
4．まとめ……3
引用・参考文献……3

図版目次

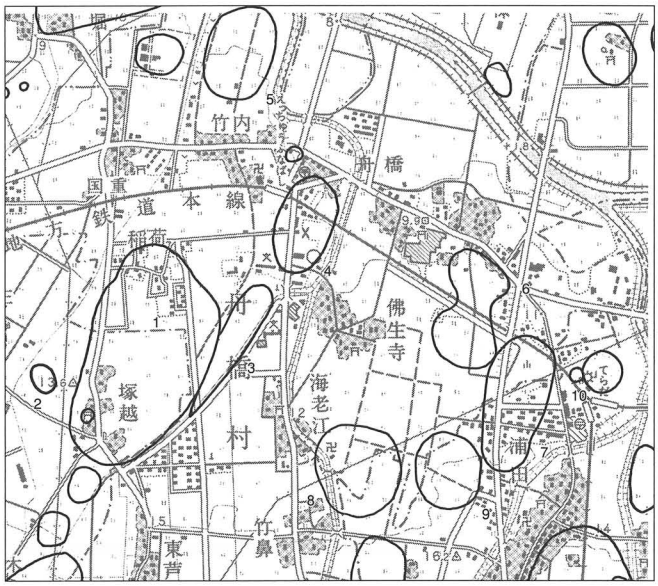
第１図　周辺の遺跡
第２図　調査位置とグリット割り
第３図　遺構図（１）
第４図　遺構図（２）
第５図　遺構図（３）
第６図　出土遺物

写真図版

図版１　全景・土層断面
図版２　出土遺物

Ⅰ．位置と環境

舟橋村は、富山県のほぼ中央に位置する。遺跡は、村南西部の稲荷地内から立山町塚越地内に広がる。常願寺川扇状地先端部の標高12～13m前後に位置し、八幡川と京坪川に挟まれた微高地上に南北方向に広がる。過去の分布調査によって縄文時代～近世に至る遺物の散布がみられる［立山町教委・富山大学人文学部考古学研究室　1998］。遺跡内には塚越古墳が、西・南側には塚越Ⅱ・Ⅲ遺跡（縄文～近世）が位置する。また、京坪川を挟んで東側には竹内東芦原遺跡・仏生寺城跡（中世）が位置する。



1. 塚越Ⅰ遺跡　2. 塚越Ⅲ遺跡　3. 東芦原遺跡　4. 仏生寺城跡
5. 竹内館跡　6. 小平遺跡　7. 浦田遺跡　8. 浦田馬渡し遺跡
9. 浦田西支遺跡　10. 大明神経塚

第１図　周辺の遺跡

Ⅱ．調査に至る経緯

平成10年１月、民間不動産業者より宅地造成に伴い約5,360m²の農業振興地域除外申請があった。県埋蔵文化財センターと協議の結果、同年１月20日に分布調査、３月９･10日に試掘調査を行い、約1,350m²において塚越Ⅰ遺跡の広がりが確認された。そのため、事業者と協議を行ったその結果、遺跡の広がりがみられない約3,800m²において事業が実施された（第１期工事）。

その後、平成11年７月、残りの部分において第２期分の造成計画がもちあがり、同年10月に農地転用の許可申請が出された。それを受け、県文化財課・県埋文センターとの協議を行い、道路部分の調査235m²について本調査を実施することとなった。実際の調査は、用水・県道路肩部分を除く約190m²を対象に実施した。調査は11月８日より開始し、11月25日に終了した。実働日数は10日である。グリットは、南北方向をＸ軸・東西方向をＹ軸とし、調査区にほぼ直行するように任意に設定した。調査地は、遺跡の北西隅にあたる。

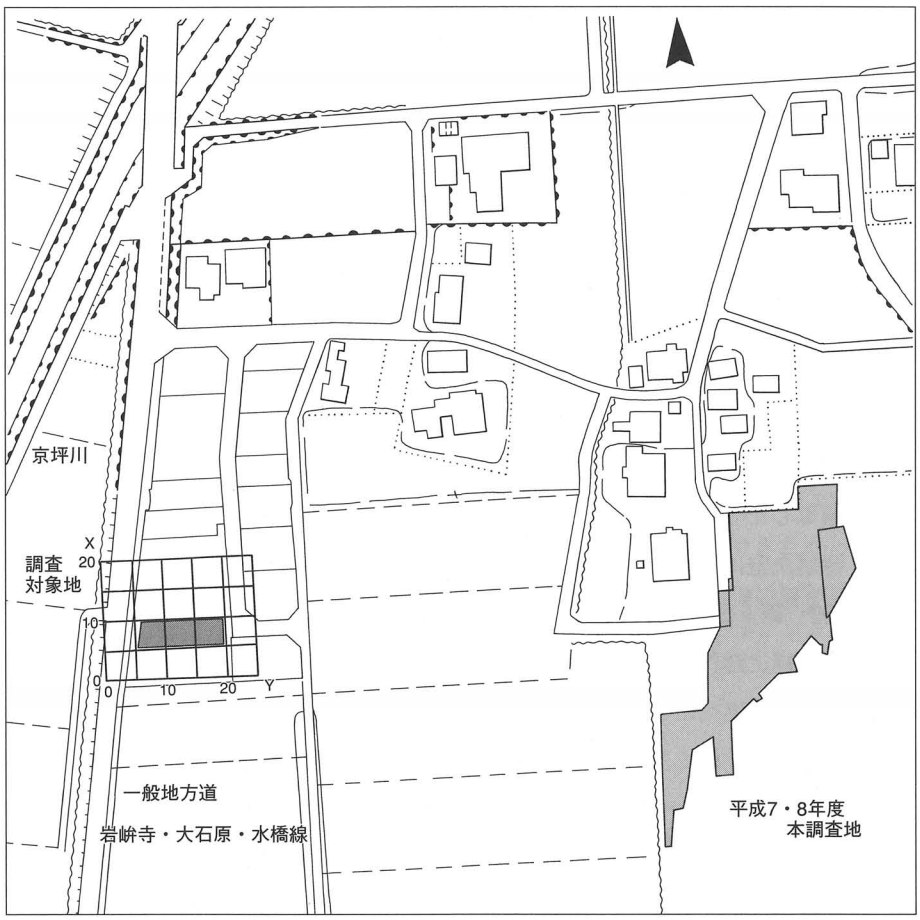


図２　調査位置とグリッド割り

Ⅲ．調査の結果

１．基本層序（第３図）

表土直下（１層）には、黄灰色シルト質砂（２層）が厚く堆積し、近世水田耕作土・床土（３～５層）が数時期確認できる。その下層に暗オリーブ褐色粘土（６層）、黒褐色シルト質粘土（７層）、明黄褐色または黄褐色粘土（８層）が続く。７層は遺物包含層、８層は地山である。６層下半には鉄分の沈着層がみられ、６・７層には地山小ブロックが混ざる。地山をさらに掘り下げると黒色シルト質粘土層（９層）が確認できたが、無遺物層である。なお、２層の堆積時期は近世後期であり、1858年の飛越大地震後の大洪水時の堆積物と考えている。

２．遺構（第３～５図）

遺構は、掘立柱建物柱穴出土のものを除いて、遺構からの遺物の出土がほとんどみられない。そのため、時期決定の決め手に欠けるものが多いが、中世前半のものと近世のものがみられる。掘立柱建物をはじめ主な遺構は、中世前半のものである。

SB01・02（第４図）　調査区西側で確認された。SB01は、調査区外に延びる総柱建物でＰ２はSD01を切る。梁行３間以上桁行２間以上の南北棟と考えている。Ｐ６・７埋積土から土師器皿が比較的多く出土した。しかし、柱穴内上層部からの出土で、破片が多いことから意識的に埋納されたものではないと思われる。柱穴埋積土は、７層もしくは８層に類似したものおよび両層の混土である。柱穴は直径の割に深いものが多く、深さ80cm程度を測るものもある。柱痕が確認できたものも多い。SB02は、SB01北側に約40cmを隔てて「Ｌ」字に柱列が並ぶ。北側および西側に柱列が延びないこと、Ｐ12・９が他に比べて浅いことから柵列として捉えるべきかもしれない。出土遺物はない。

SB03（第５図）　調査区東側で確認された梁行１間桁行２間の小型側柱建物で、SB01に付随する建物と考える。建物平面形は歪み、柱穴規模はSB01に比べて小型である。遺物は、Ｐ２より土師器皿が出土している。

SK03（第３図）　長軸2.6m短軸2.2m深さ数cmの方形土壙である。SD02と切り合いがあるが、新旧関係は判然としない。出土遺物はなく、詳細な時期は不明であるが、SB01のすぐ東側に位置していることから建物に伴う可能性がある。

SD05（第３図）　調査区東端で一部が確認された。幅は不明であるが、深さは90cm程度を測る。出土遺物はないが、埋積土より近世段階の溝で、近世後半に埋没したと考えられる。

SD04（第３・５図）　幅・深さともに20cmあまりを測る。出土遺物は、弥生時代の細片が若干出土したのみである。なお、その付近から縄文土器片が数片出土している。これらの遺物が、溝の時期を示すものはどうかは判然としない。

その他の遺構第３～５図　全体に浅いものが多くプランもはっきりしない溝・土壙がいくつか見られる。埋積土は、７層に類似した土に７層ブロックが混ざるものが多い。SK04・SD01から弥生土器が出土しているほかは出土遺物はなく、時期決定は難しい。SK04・SD01の出土遺物が遺構の時期を示しているものかどうかは判然としない。

3．遺物（第６図）

遺物は、縄文時代～近世に至るものが出土している。層量的には少なく浅箱で１箱程度である。そのうち遺構に伴うものは前章で述べたとおりであるが、図化できたものは少ない。掘立柱建物柱穴出土の土師器皿（１～11）は、口縁端部をつまみ上げて三角形状に面取りするものが多く、底部からやや丸みをもって立ち上がるものが多い。また、口縁直下に幅の広いナデ調整を施す。口径14～15cm程度の大型のものと９～10cm程度の小型のものがある。時期は、13世紀前半である。なお、11はやや深くなることから、12・14のように古代の土師器碗である可能性もある。土師器碗の時期ははっきりしない。15は古墳時代の壺、16は弥生時代の蓋つまみである。17～18は越中瀬戸皿で、17は灰釉が、18は鉄釉が施される。19は、鉄釉がかかった小壺である。

Ⅳ．まとめ

１．中世について

塚越Ⅰ遺跡は、平成７・８年度に今回調査区の東約80mが調査され、報告書が刊行されている［舟橋村教委1997］。その結果、縄文時代～近世の遺構・遺物が確認されている。今年度の調査では、中世段階の遺構・遺物以外は明確ではない。そのため、中世について両地点を比較してみる。

先の調査では掘立柱建物が２棟確認されている。これらの建物はいずれも梁行１間の側柱建物である。この２棟の建物は、床面積44㎡の中規模建物と同6.7㎡の小型の建物で、同時期に存在していた可能性があるとされている。直接建物に伴う遺物の出土がないため時期決定は困難であるが、包含層出土の遺物は15・16世紀のものが多い。その他の遺構は、溝と若干の土坑がある程度で、遺構密度は高くない。

それに対し、今年度の調査で確認した掘立柱建物（ここでは、建物として断定しきれないSB02については除く）は、総柱建物１棟と側柱建物１棟である。SB01の床面積は不明であるが、中規模程度の建物と思われる。また、SB03は約5.7㎡を測る小型の建物である。建物時期は、柱穴より出土している土師器皿の年代から、12世紀後半～13世紀前半頃と考えている。建物と同時期の遺構は、調査面積が小さいせいもあるがほとんどみられず遺構密度は高いとはいえない。

以上から、両地点は、時期的に重なりはみられない。両時期の遺構の広がりがどの程度であるかは不明である。しかし、八幡川が今回の調査区のすぐ西を流れていることから、この周りが遺跡の西端にあたることが考えられる。現在の稲荷集落の中心が先の調査地点北側にあることから、今回の調査地付近にあった古い段階の集落が東へ移ったと考える。

２．基本層序２層：黄灰色シルト質砂について

基本層序でも述べたが、この層は、直径２～15㎜程度の小礫が多く混ざり、透水性が高くガサガサした土である。前後の層界も明瞭である。一見したところ火山性噴出物か、それに起因したものと思われた。現水田下では15㎝前後、道路下では40～50㎝程度の厚さを測る。また、植物による擾乱作用や土壌化はみられない。この層は、調査段階で堅固に締まっており、人力で拡張した際には剣スコップでもなかなか歯が立たなかった。時期的には直下の水田耕作土・床土層出土遺物より近世後期（18世紀後半以降）を考えている。

この埋積土が火山噴出物とは考えられないことから、水害による堆積の可能性を考えた。そこで近世後期の水害について関係資料［立山カルデラ砂防博物館　1998、立山町史下巻　1984］をみると、この周りに被害をもたらせたことが確認できたのは、1858年の「安政の大災害」である。この災害は、飛越大地震の後におこった土石流を伴う大洪水である。この大洪水の際には、大岩や大木が大量の泥と混ざりまるで固い粥が流れているようであったといい、この辺りも被災していることが分かる。現地における土層断面では、遺物や木などの自然遺物は確認できなかった点が気になるが、広い範囲で厚い堆積がみられることから、この洪水による堆積と推測した。今後、同様の層が被災したエリアで他にも確認されるか、自然科学分析などを実施する機会があることを期待する。

引用・参考文献

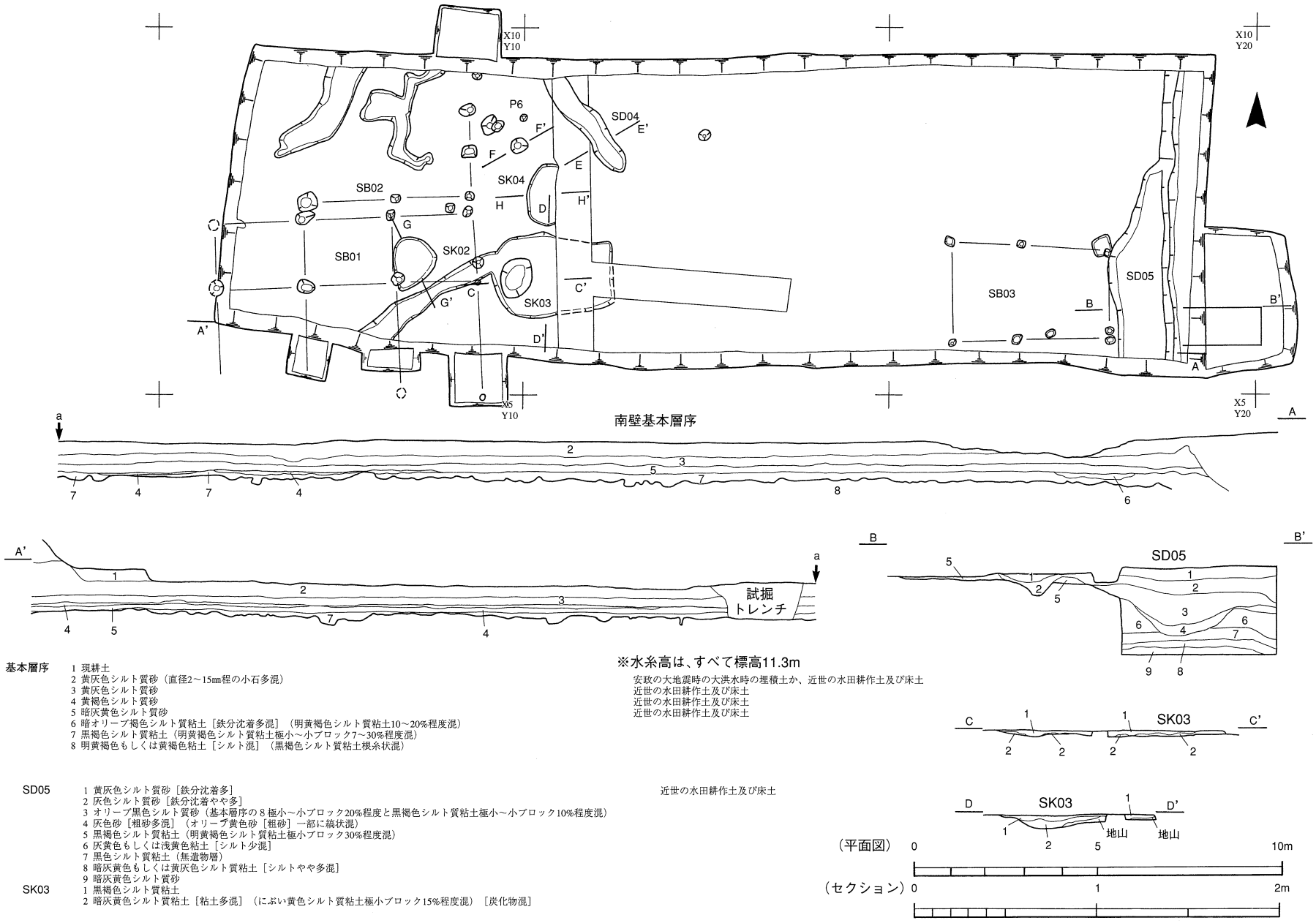
舟橋村教育委員会　1997　『塚越Ⅰ遺跡』第３・４次発掘調査報告書

立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室　1988『立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ　1987年度』

立山町　1984　『立山町史　下巻』

立山カルデラ砂防博物館　1998『越中立山大鳶崩れ』

第3図　遺構図(1)



基本層序
1 現耕土
2 黄灰色シルト質砂（直径2～15㎜程の小石多混）
3 黄灰色シルト質砂
4 黄褐色シルト質砂
5 暗灰黄色シルト質砂
6 暗オリーブ褐色シルト質粘土［鉄分沈着多混］（明黄褐色シルト質粘土10～20%程度混）
7 黒褐色シルト質粘土（明黄褐色シルト質粘土極小～小ブロック7～30%程度混）
8 明黄褐色もしくは黄褐色粘土［シルト混］（黒褐色シルト質粘土根糸状混）

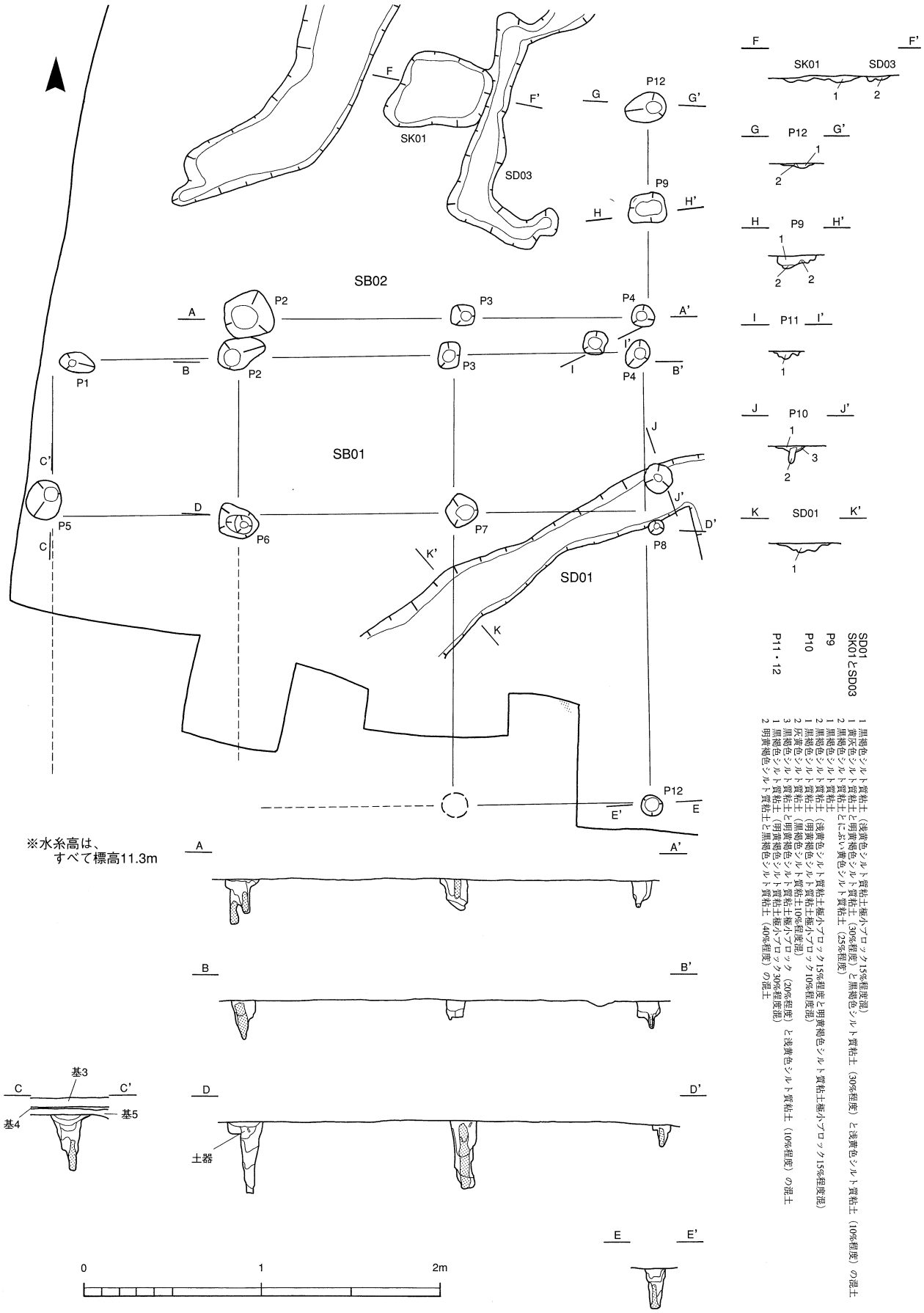
※水糸高は、すべて標高11.3m

安政の大地震時の大洪水時の埋積土か、近世の水田耕作土及び床土
近世の水田耕作土及び床土
近世の水田耕作土及び床土
近世の水田耕作土及び床土

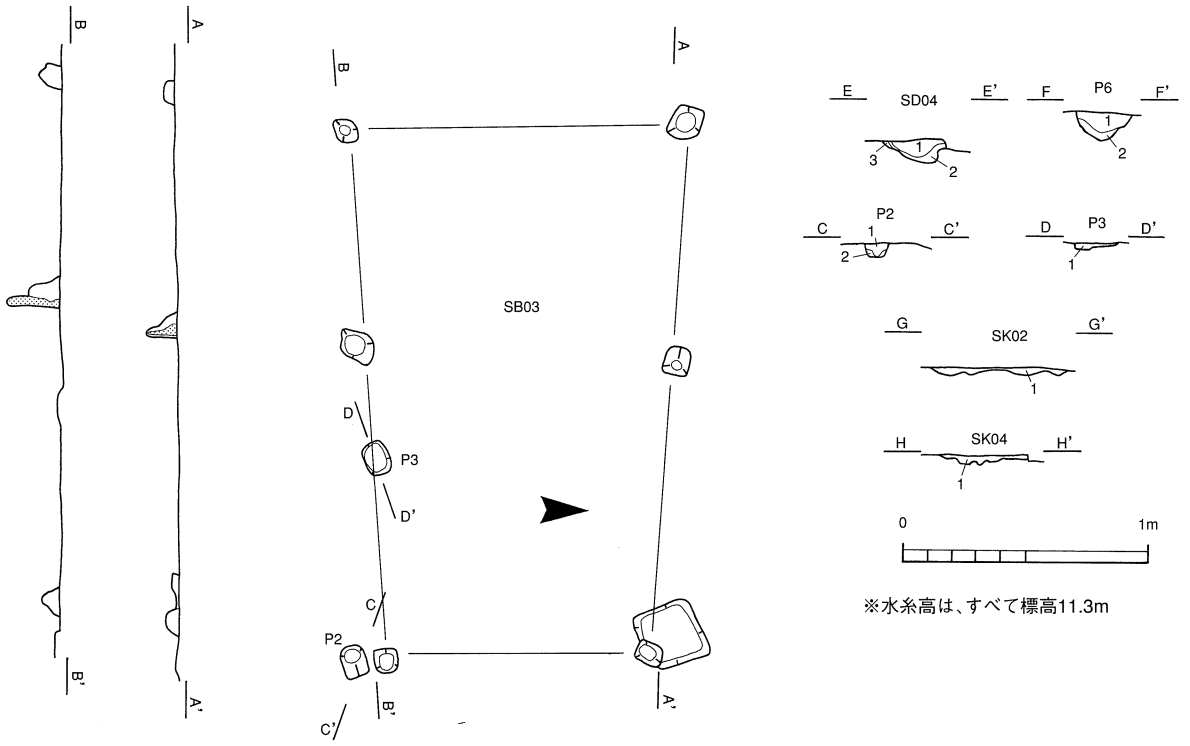
SD05
1 黄灰色シルト質砂［鉄分沈着多］
2 灰色シルト質砂［鉄分沈着やや多］
3 オリーブ黒色シルト質砂（基本層序の8極小～小ブロック20%程度と黒褐色シルト質粘土極小～小ブロック10%程度混）
4 灰色砂［粗砂多混］（オリーブ黄色砂［粗砂］一部に縞状混）
5 黒褐色シルト質粘土（明黄褐色シルト質粘土極小ブロック30%程度混）
6 灰黄色もしくは浅黄色粘土［シルト少混］
7 黒色シルト質粘土（無遺物層）
8 暗灰黄色もしくは黄灰色シルト質粘土［シルトやや多混］
9 暗灰黄色シルト質砂

近世の水田耕作土及び床土

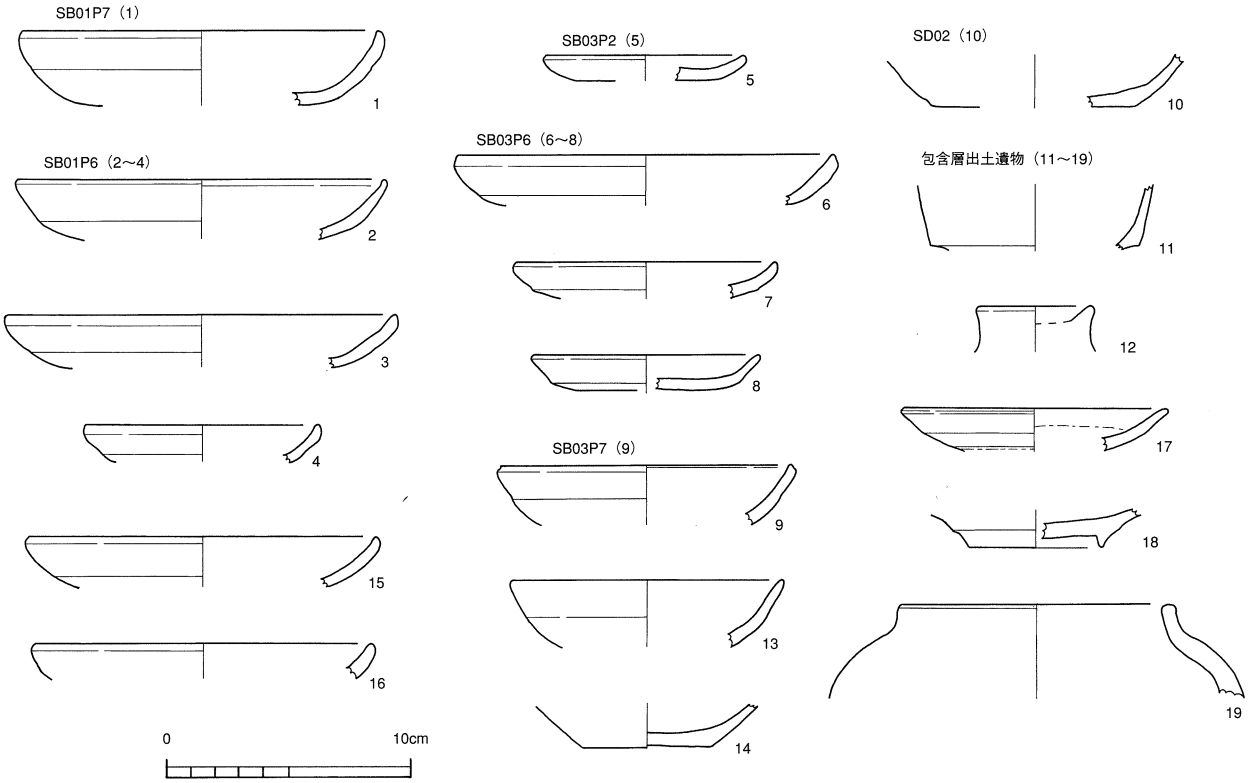
SK03
1 黒褐色シルト質粘土
2 暗灰黄色シルト質粘土［粘土多混］（にぶい黄色シルト質粘土極小ブロック15%程度混）［炭化物混］


SB02
SB01
SK01
SD03
SD01
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
※水糸高は、
すべて標高11.3m
基3
基4
基5
土器
0
1
2m
SD01
1 黒褐色シルト質粘土（浅黄色シルト質粘土極小ブロック15%程度混）
SK01とSD03
1 黄灰色シルト質粘土と明黄褐色シルト質粘土（30%程度）と黒褐色シルト質粘土（30%程度）と浅黄色シルト質粘土（10%程度）の混土
2 黒褐色シルト質粘土とにぶい黄色シルト質粘土（25%程度）
P9
1 黒褐色シルト質粘土
2 黒褐色シルト質粘土（浅黄色シルト質粘土極小ブロック15%程度と明黄褐色シルト質粘土極小ブロック15%程度混）
P10
1 黒褐色シルト質粘土（明黄褐色シルト質粘土極小ブロック10%程度混）
2 灰黄色シルト質粘土（黒褐色シルト質粘土10%程度混）
P11・12
3 黒褐色シルト質粘土（明黄褐色シルト質粘土極小ブロック20%程度）と浅黄色シルト質粘土（10%程度）の混土
1 黒褐色シルト質粘土（明黄褐色シルト質粘土極小ブロック30%程度混）
2 明黄褐色シルト質粘土と黒褐色シルト質粘土（40%程度）の混土

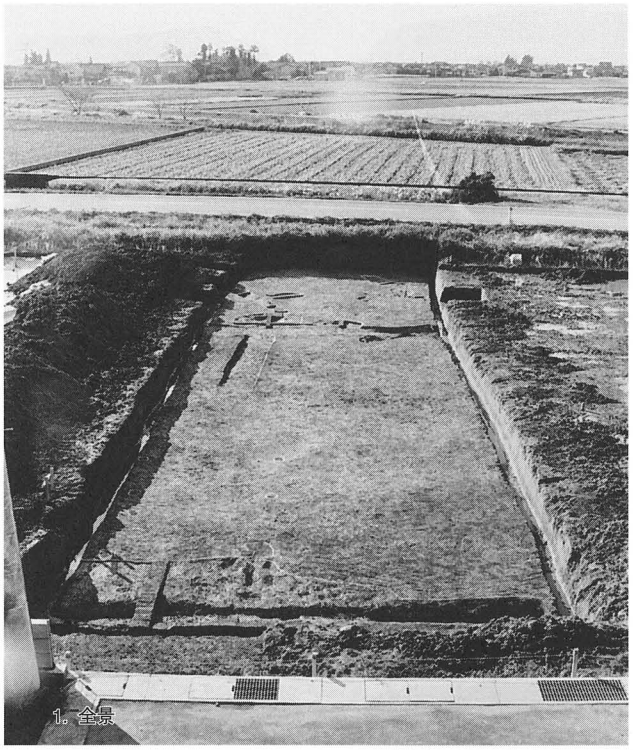
第４図　遺構図(2)

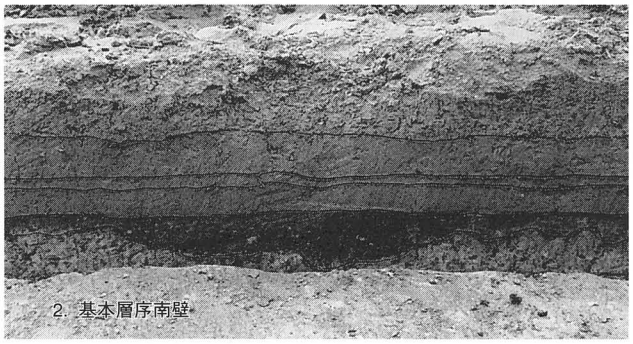


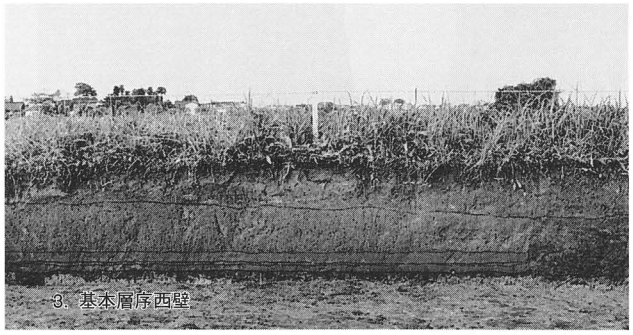
SD04　1黒褐色シルト質粘土（にぶい黄色シルト質粘土極小ブロック10%程度混）
　　2暗灰黄色シルト質粘土［粘土多混］（にぶい黄色シルト質粘土極小ブロック15%程度混）［炭化物混］
　　3黒褐色シルト質粘土
SK02　1黄灰色シルト質粘土と明黄褐色シルト質粘土（30%程度）と黒褐色シルト質粘土（30%程度）と浅黄色シルト質粘土（10%程度）の混土
SK04　1黒褐色シルト質粘土と明黄褐色シルト質粘土極小～小ブロック（30%程度）の混土
P2　1黄灰色シルト質粘土（にぶい黄色シルト質粘土極小ブロック7%程度混）
　　2明黄褐色シルト質粘土（黄灰色シルト質粘土15%程度混）
P3　1黄灰色シルト質粘土（にぶい黄色シルト質粘土極小ブロック7%程度混）
P6　1黒褐色シルト質粘土
　　2黒褐色シルト質粘土（浅黄色シルト質粘土極小ブロック15%程度と明黄褐色シルト質粘土極小ブロック15%程度混）

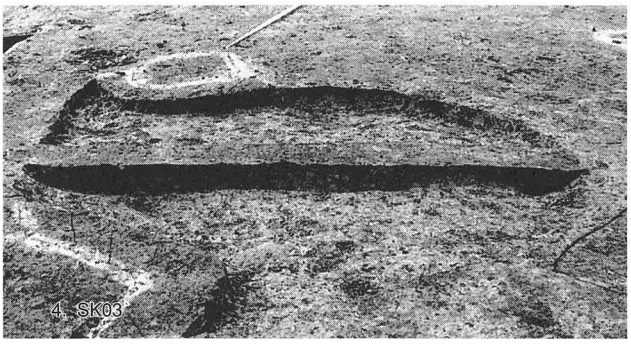


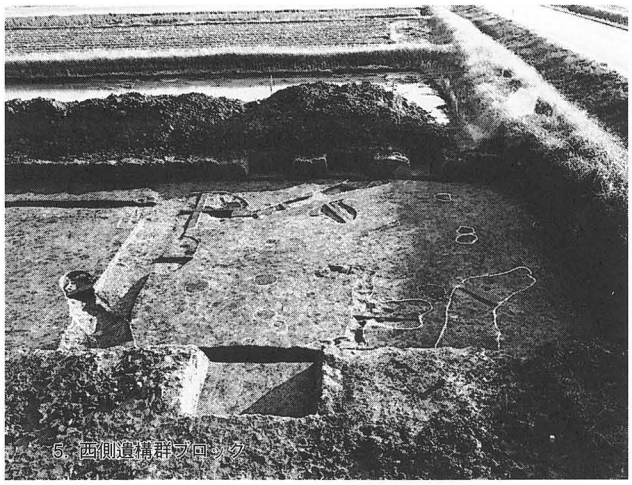
第５図（上）　遺構図（3）、第６図（下）　出土遺物


1. 全景


2. 基本層序南壁


3. 基本層序西壁

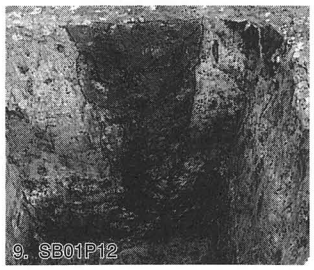

4. SK03


5. 西側遺構群ブロック

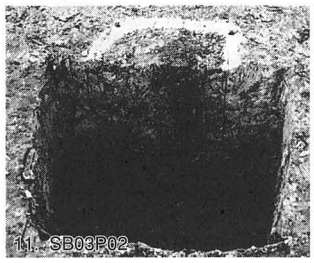
6. SB03ブロック

7. SB01P06

8. SB01P07

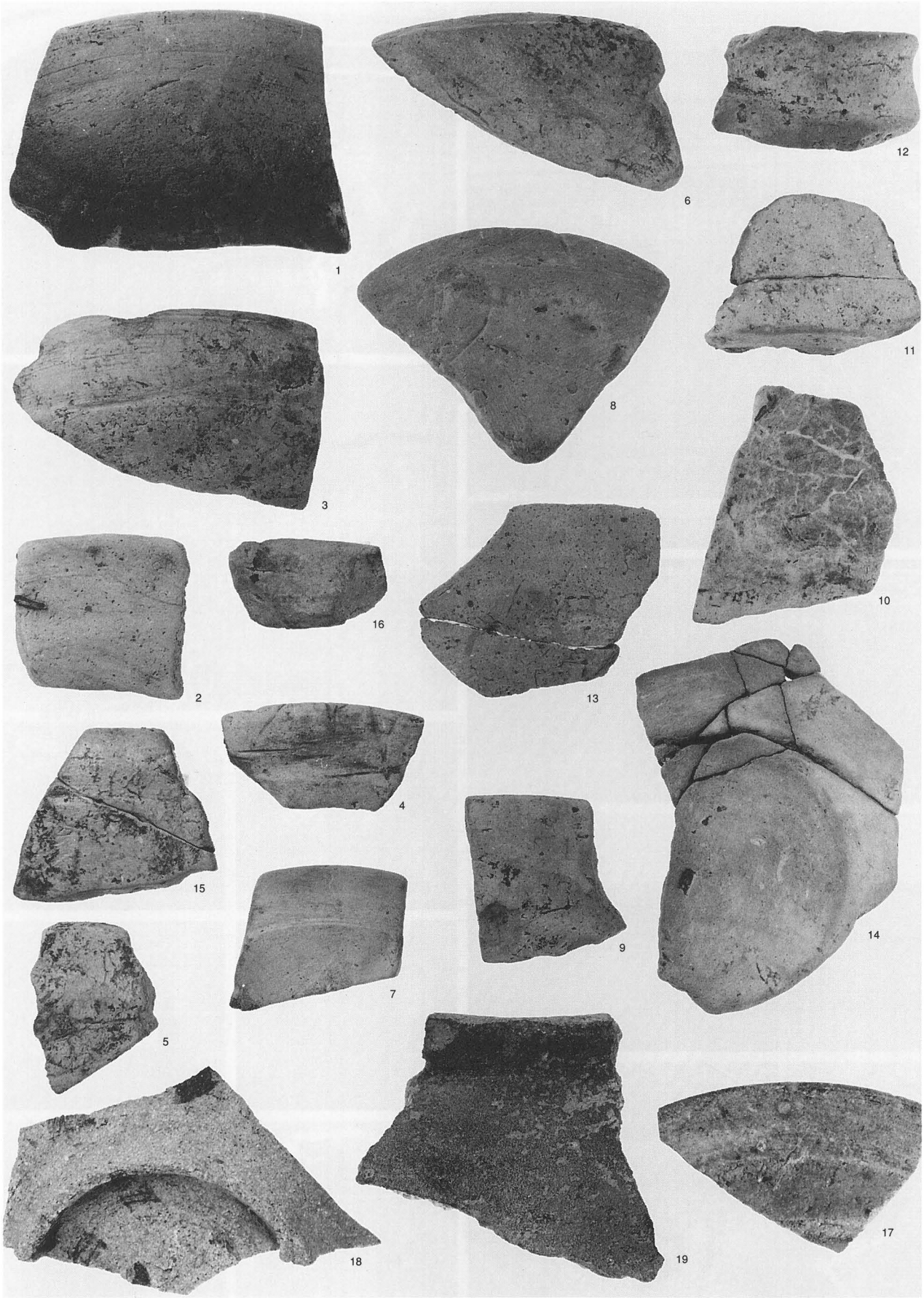

9. SB01P12

10. SB02P03


11. SB03P02

12. SB03P05

図版1　全景・土層断面



図版 2　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とやまけんなかにいかわぐんふなはしむらつかごしいちいせきはっくつちょうさほうこく
書名	富山県中新川郡舟橋村塚越Ⅰ遺跡発掘調査報告
編著者	越前慶祐
編集期間	舟橋村教育委員会富山県埋蔵文化財センター
所在地	〒930-0295　富山県中新川郡舟橋村仏生寺55　TEL076（464）1121
	〒930-0115　富山県富山市茶屋町206-3　TEL076（434）2814
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
塚越Ⅰ遺跡	富山県中新川郡 舟橋村稲荷	16321	321009	36° 41′ 10″	137° 18′ 36″	11月8日 ～11月26日	190m²	道路新設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
塚越Ⅰ遺跡	集落	中世前期（13世紀）	掘立柱建物・土坑・溝	弥生土器、中世土師器、越中瀬戸、肥前系陶磁器

舟橋村埋蔵文化財調査報告書5

富山県舟橋村
塚越Ⅰ遺跡発掘調査報告書

発行日　平成12年3月31日
発　行　舟橋村教育委員会

〒930-0295
富山県中新川郡舟橋村仏生寺55
TEL　076（464）1121

編　集　富山県埋蔵文化財センター
印　刷　北日本印刷株式会社